

日清戦争後の歴史を繰り返してはならない（望海楼）

人民網 2014 年 3 月 5 日 ソース：人民日報海外版

銭利華

阿部信行

（訳者コメント）

人民網に日中関係に関する中国軍人の投稿論文が掲載されましたので、紹介します。

論旨は明快ですが、論文末尾の日米関係に関する論旨が飛躍し過ぎて理解できません。また論旨の根拠が示されていません。

中国の個人の投稿記事を見ると、前の部分と後の部分が一貫していない論文がたまに見られます。その理由は、論旨が政府の方針と若干異なるため、記事が没になるのを避けるため、党の方針を最後にコピペしたためです。政府方針のコピペは、追及されても逃げられる効果もあります。

前便の一部を訂正します。最近発生した中国の集団殺傷事件の場所は、ウイグル自治区ではなく雲南省昆明でした。お詫びして訂正します。

国際的に戦争の気運を煽る人々がいる。例えば、現在のアジア特に東南アジアを 20 世紀初頭の英独の対立、或いは 19 世紀後期の英米の対立になぞらえる人々である。しかしアジアの情勢と欧州の情勢は明らかに異なり、21 世紀の情勢と 19 世紀末や 20 世紀初頭の情勢とは明らかに異なる。したがって安易に比較することはしばしば社会及び民衆をミスリードする。

東南アジアにおいて、突発的な衝突が起こり得るだろうか、例えば突発的な銃撃事件などが起こり得るのだろうか？この可能性を完全に排除することはできないが、可能性がどの程度であろうと、中国から起こすことはない。中国軍は、最初に弾を撃つことはしない。しかしもし誰かが最初に撃てきたら、衝突と戦争が中国の頭上にふりかかったら、中国は強力な反撃をするだろう。

中国であろうと、米国であろうとまた日本であろうと戦争は望まない。世界各国の経済は傾いており、世界の大勢は平和と発展を望んでいる。戦争が起きればやっと回復しかけた経済を破壊するだけだ。軍隊の存在理由は、当然、戦争に備えるためである。軍備の目的は、戦争を抑止するためである。十分な準備があつて初めて、戦争を抑止し、衝突を予防し、危険を和らげ、戦争を避けることが出来る。

戦争は国家の政治的意志の戦いであり、国家の実力の戦いである。中国の GDP は、2013 年に日本の 2 倍近くになり、2014 年には日本の 2 倍を完全に超える。人口の規模も、経済実力もまた軍事力を含む総合国力も、我々は日本をはるか

に超える。中日間の貿易依存度は相当高く、一旦戦端が開かれると、日本経済に対する打撃は致命的である。

日本は島国であり、資源が極めて乏しく、戦争を発動し或いは他国と一緒にな
って中国に対し空海一体戦或いは離岸制御戦を発動し、中国を封鎖したとして
も、中国は反撃する能力がある。戦争に訴えても、従来から良い結果は生まれ
ない。強大な米国であっても、イラク戦争、アフガン戦争で何ら得るものが無
かった。まして西太平洋の島国である日本においては言うまでもない。戦争は
民衆の心を考慮しなければならない。第二次大戦の記憶が残っており、米国の 2
度の原爆投下によって特に日本青年の戦争に対する嫌悪の感情は強く、多くの
若い人々は軍に志願する熱意に欠け、戦場に行きたがらない。もし日本が外交
上、安全上米国の支配下を脱することが出来ないならば、正常な国家になるこ
とはできない。米国は、現在調整期にあり、日本への締め付けを緩めている。
数年後、米国が一旦元気を取り戻したならば、必ず日本を抑え込むであろう。
米日の対立、特に日本の米国に対する嫌悪感と憎悪感は、中国に対する憎悪感
よりもはるかに大きい。米国が日本に対して行った心理的な加害度は、如何な
る国家に対するものよりも大きい。現在、この 2 つの国家は、単にお互いに必
要としているという理由のみで対立が表面化しないだけだ。しかし時が来れば
対立が爆発する。

今年は、日清戦争後 120 年になる。日清戦争後、日本は 2 度中国の発展を妨害
した。日本が再び冒険し、中国の平和発展に対する 3 度目の妨害を行う可能性
はあるだろうか？歴史を繰り返してはならない。今日の中国は、1894 年の中国
ではない。また 1930 年代の中国でもない。中国軍隊及び中国人民は、能力があ
り、手段があり、日本が造りだす一切の妨害を排除することが出来る。

(作者は本報特約評論員、全国政協委員、少将)

以上